

幼児教育専攻学生による音楽的活動の取り組み

—特別支援学校小学部での実践—

中川宣子 中島有扶子 平井恭子

(京都教育大学附属特別支援学校) (京都教育大学)

Approach of Musical Activity by Students of Infant Education
—Practice for Elementary School Children in the Special Support School—

Noriko NAKAGAWA, Yuko NAKAJIMA, Kyoko HIRAI

2009年11月30日受理

抄録：本研究は、本学幼児教育科の音楽教育ゼミに所属する学生が、附属特別支援学校小学部において児童を対象に音楽的活動の実践を行った記録をもとに、今回の活動が学生の教育観や教材観に与えた影響や特別支援学校側からみたメリットや課題等について考察を行ったものである。その結果、学生は試行錯誤を繰り返しながら子どもたちの主体的な参加を促すために必要な計画や準備の必要性、教師自身が重要な環境であることなどを体験から学ぶことができたといえる。また今回の一連の活動は、特別支援学校の児童にとって音楽に対する興味・関心を高める上で非常に効果的であったといえる。

キーワード：音楽的活動、幼児教育専攻学生、特別支援学校

I. はじめに

本研究は、本学幼児教育科の音楽教育ゼミに所属する学生5人が、附属特別支援学校小学部の児童を対象に行った音楽活動の実践が彼らの教育観や教材観等に与えた影響と、特別支援学校小学部の教員から見たこの活動のメリットや課題等について考察するものである。

筆者(平井)が指導する幼児教育科音楽教育ゼミの学生は年に2回(3回生の12月、4回生の5月)、就学前の乳幼児を対象にした「うたとおはなしの会」を学内で開催し、音楽を伴う遊びやうた、お話などを地域の親子で楽しむ機会を提供している。この「うたとおはなしの会」を通じて学生たち自身は音楽を伴う様々な教材を研究したり、その教材をいかなる方法で提供するのが効果的なのかということを生の観客との対話の中から学んでいるといえる。この活動を契機に、特別支援学校の小学部の児童を対象に同様の教材や音楽を使用した活動ができないうか、という考えからこの取り組みが始まった。

II. 試行錯誤の過程(第1～3回目まで)

実施にあたっては、活動の主体となる幼児教育科の学生と特別支援学校の担当教員との間で実施方法や教材の選択等について事前に打ち合わせを行い、実施後は反省を繰り返しながら、徐々に活動内容や方法の改善を図っていった。これまでに実施した取り組みは全部で4回あり、1回目から3回目までの内容は次の通りである。

(1) 第1回目(2009年2月4日の実践)

[実施前] 実施1週間前に学生が、合同生活の時間に学校を訪問し戸外での遊びに参加した。この日はしっぽとりゲームが行われており、身体を動かして子どもたちとの触れ合いを楽しむことを通じて、学生自身が子どもたちの実態を大きく把握することができた。第1回目の打ち合わせは内容を細かく決めるのではなく、試行的に学生のアイディアで活動を展開してみることにした。

〔実施当日〕

- ① オープニング「合同生活のうた」…合同生活の時間には毎回歌っている歌。輪になって手をつなぎ、拍にあわせて腕を前後に振りながら歌う。
- ② 歌遊び「わすれずに」…「ゆきの野原に遊びにいこう」の歌詞で始まる軽快な曲。歌い手の学生のリードで手遊びをしながら歌う。歌詞の中に出てくる帽子、セーター、手袋、襟巻などを身につけた人形が、歌詞の順番通りに登場する。
- ③ パネルシアター「てぶくろ」…ウクライナ民話「てぶくろ」をパネルシアターで演じる。途中で繰り返し「てぶくろてぶくろ、ぎゅっぎゅっぎゅっ…」という歌が歌われ、演じ手の学生は動作を伴いながらお話を展開する。
- ④ 楽器遊び「ミッキーマウスマーチ」…児童に好きな打楽器を1つずつ持たせ、学生の歌う「ミッキーマウスマーチ」にあわせて演奏させる。
- ⑤ 歌とダンス「鬼のパンツ」…音楽にあわせて歌いながら踊る。軽快な曲のリズムによって鬼のポーズ、手拍子、足踏みなどの動きが次々に出てくる。
- ⑥ 歌とダンス「手のひらを太陽に」…これまでに児童が何度も歌ったり踊ったりしてきた経験があるお馴染みの曲である。

〔実施後の学生の反省〕

- 最初に歌った「わすれずに」は子どもたちが知らない曲だった。活動の始まりは、子どもたちの気持ちをとらえることが大切なので、なじみのある曲がよいのではないか。例えば次回からは活動の前に必ず歌うテーマソング的な曲を用いるとよいかも知れない。
- 子どもたちに集中してもらうために原作よりかなり短めに編集したつもりではあったが、途中で子どもたちが飽きたためかごそごそしはじめた。話を淡々と進めていくのではなく「次は誰が来るだろう?」「今てぶくろの中には○と○がいるね」など、子どもに問いかけながら進める必要があるのではないか?
- 楽器遊びは、学生が立って子どもたちが座った状態で行っていたため、一緒に音楽を作り上げているという一体感がなかった。学生も子どもと同じように座ったり、お互いの顔が見えるよう円形になって行くななど、の工夫が必要ではなかったか?
- 「鬼のパンツ」はかなりテンポが速く、それに合わせて次々に新しい振りをこなしていく必要がある。学生でさえ順番を間違ってしまうことがあるので、子どもたちは当然、一緒に動けていなかった。もう少し動きの種類を少なくして、ピアノなどを使い、子どもが無理なく行えるテンポで行うべきではなかったか?
- 最後に行った「手のひらを太陽に」は子どもたちが慣れ親しんでいる曲なので、非常に生き生きと動けていた。活動の中に一曲はこのような耳なじみの曲を用いると子どもの気持ちを解きほぐす上で効果的である。
- 広い場所で行っているのに座ったままの活動が多かった。もっと子どもたちがのびのびと体を動かせる活動を取り入れたほうがよいのではないか?
- 学生の動きが小さくてわかりにくかった。もっと動作を大きく示すべきである。

(2) 第2回目(2009年3月6日)

〔実施前〕

- 前回の反省から、日ごろよく歌っていて馴染みのある曲のほうが音楽にのりやすいということが分かったので、どのような歌が適切であるか、特別支援学校の教員に尋ねた。その結果、普段の授業でうたっている「まんげつさんみかづきさん」(座ったままで体操しながら歌う)、「ゆき」(今年は雪が降っていないのであまり歌っていない)、「ミッキーマウス」マーチ(楽器遊びを継続中)、「スマイル」(卒業式に向けて練習中)などが候補としてあがった。また、特別支援学校の子どもの歌唱指導においては「歌詞の全体把握が難しい」「部分的に動作を入れることは可能(休符の部分で「おーっ」と手を振り上げるなど)」「見て真似る、単純な繰り返しのものは歌いやすい」などの特徴があることに留意すべきであるとの指摘も受けた。これらの点を考慮した上で、部分的に動作が伴い、見て真似ることができる「しあわせなら手をたたこう」を用いることになった。
- 特別支援学校の教員から「子どもたちが生の演奏を聞く機会がほとんどない」との指摘があった。そこで、

是非今回は生演奏を取り入れようということになり、音楽室の中で演奏可能な楽器を探した。マリンバ、ベル、ドラム、太鼓などの楽器があり、その中で今回はマリンバの演奏を取り入れることにした。

- プログラムの順番が分かったほうが子どもたちに活動の見通しがつきやすい、という指摘を受けた。そこで、今回から順番を書いた紙を用意し、1つのプログラムが終わったらはずす方法をとることにした。

[実施当日]

- ① 歌とダンス「幸せなら手をたたこう」…学生が歌を歌いながらフレーズごとに手拍子、足拍子、腰ふり、回転などの動作を入れる。子どもたちは動作を真似ながら歌う。
- ② パネルシアター「森のくまさん」…ペーパーで作った絵人形（女の子と熊）を2人の学生が担当し、歌詞の進行に合わせて演じる。ただパネルに貼るだけではなく、実際に絵人形をもって追いかけることで臨場感を出した。
- ③ マリンバ演奏「エンターティナー」「トルコ行進曲」…筆者（平井）が電子オルガンで伴奏し、学生がマリンバを演奏した。

[実施後の学生の反省]

- 今回は内容を精選し、時間も15分程度だったため、子どもたちが飽きることなく参加できていた。
- 「しあわせなら手をたたこう」は子どもたちもよく知っていたため、楽しそうに参加できていた。1回通り歌って終わったので、少し短かったかもしれない。もう一度繰り返すなど子どもの様子を見ながら対応すべきであった。
- プログラムを提示することは効果があった。次に何が始まるのか、という見通しをもつことが子どもたちの積極的参加を促すことにつながる。
- 司会者がいろいろ代わるのはよくない。一人に限定した方が子どもたちの中で混乱が起こらない。
- 音楽の生演奏は、子どもたちが非常に集中していた。興味をもって聞いているのがよくわかった。

(3) 第3回目(2009年7月1日)

[実施前]

- 1回目2回目の経験を生かし、2回目で好評だった音楽の生演奏を取り入れることにした。また、子どもたちが喜ぶ曲として、繰り返しのあるもの、動作を見ながら模倣できるものなどの要素を含むものを取り入れ、教材選択を行った。

[実施当日]

- ① 歌とダンス「手のひらを太陽に」…1回目、2回目に続いて、この活動のテーマソングとして位置づけた。
- ② パネルシアター「あまのがわ きらりんこ」…七夕が近いのでそれにちなんだ題材から選曲した。「あまのがわ、きらりんこ」という同じメロディーとそれに伴う動き（天の川を表現する特徴的な動き）が何度も繰り返される。学生2人がこれを歌いながら演じ、子どもたちは模倣する。
- ③ トーンチャイム演奏「星に願いを」「きらきら星変奏曲」…学生5人が数本ずつのトーンチャイムを担当し、演奏した。

[実施後の学生の反省]

- 前回到引き続き、楽器演奏のときは子どもたちがよく集中していた。特にトーンチャイムはハーモニーの響きが非常に美しいので、音に集中しやすかったのかも知れない。2曲目の「きらきらぼし」は知っている子どももいて、口ずさむ姿も見られた。
- パネルシアターは毎回取り入れてきて今回は3回目になるが、演じ手と観客との距離を感じる。もっと子どもたちが参加できるような形にできないだろうか？例えば今回の場合、笹の葉に短冊を貼るような場面で子どもたち自身が一つずつ貼っていくなど、工夫次第で子どもたちも参加できたはずである。

Ⅲ. 児童参加型活動の試み（第4回目）

1. 計画

第1回目～第3回目の実践から、学生間において、特別支援学校の児童が本当に楽しんでいるだろうかという疑問がわいてきた。なぜなら、学生たちの歌やお話は、視覚的な教材をふんだんに使ってはいたが児童への一方向の提示になっていたのではないかと考えられるからである。特別支援学校の児童が、本当に楽しんでいるという実感を得るためには、音楽的活動の中で、児童自身が身体を動かして体験し、直接的に参加できる内容を取り入れる必要があると考えられる。そこで、4回目の実践では、より児童が参加できる実践するために、計画段階から実践当日まで、幼児教育専攻学生、大学教員（幼児教育）、特別支援学校教員の3者が協同して、計画案の検討、修正、具体的な打ち合わせに取り組んだ。

(1) 第1回目の打ち合わせ（2009年10月7日）

当初、学生の計画では、「手遊び」をしようという提案がなされた。これは、児童が歌に合わせて学生の手動きを模倣して参加するという内容であった。

「手遊び」も身体を動かす音楽活動であるが、特別支援学校の児童を対象とする場合、身体全体を使って音楽を感じられる活動の方が参加しやすいと考え、特別支援学校教員より、ひとつの実践例を紹介した。それは、「芋掘りあそび」という遊びである。

特別支援学校では4月当初から学校園でサツマイモを育てており、秋になり芋掘りの時期がやってきた。そこで、実際の芋掘りの前に、芋掘りに見立てた遊びを行うことにした。手順としてまず、教員が芋役になり、腰に綱を巻いておき、児童は「よいしょ！よいしょ！」というかけ声に合わせて綱を引っ張る。芋役の教員は引っ張られまいと必死に踏ん張り、児童は必死に引っ張るといったやりとりを通じて、お互いに手応えを感じることができる点にメリットがある。そして最後は芋役の教員が見事、設定したラインから引っ張り出され、芋を掘り出し、「やったー」とかけ声をかけて喜びあう…という流れである。

学生たちはこの「芋掘り遊び」に興味を示し、早速、この遊びを活用した音楽的活動の計画案を練りだした。

(2) 計画案①の作成

第1回目の打ち合わせを受け、計画案①を学生が作成した。（表1）

今回、歌う歌は『大きなかぶ』（名村宏作詞／越部信義作曲）の替え歌で、歌詞は学生が作詞した（表2）。

表2. 『大きなかぶ』の替え歌『大きな芋』

1※	おじいさんが うえた いものなえから { 大きな いもが できました いもを ひっぱる おじいさん ☆ { よいしょ よいしょ よいしょ { 大きな いもは ぬけません
2	※繰り返し それを ひっぱる ○○さん それを ひっぱる ○○さん …… ☆繰り返し
3	※繰り返し それを ひっぱる ○○さん それを ひっぱる ○○さん よいしょ よいしょ よいしょ 大きな いもは ぬけました



表1. 第4回目 計画案①

時間	プログラム	学生の動き	子どもたちの動き	附属教員の援助
13:30	はじまりの歌	はじめのあいさつをする。 児童と一緒に円の中に入って歌を歌う。	歌を歌う。円の状態。	
13:32	手のひらを太陽に	円の状態のまま歌いながら回ったり、踊ったりする。	円の状態のまま歌いながら回ったり、踊ったりする。	
13:35	大きないも	おじいさん役とおばあさん役になる。芋を育てて抜くところまでを演じる。 そこから、歌を歌い、芋をひっぱる動作をする。 助けを呼び、子ども数名と先生一人が後ろについて引っ張るように指示する。 全員の子どもの呼び終わり、歌を歌い終わったら芋が抜ける。	はじめは、学生の行う劇を見る。 横に二列に並んで見る。 名前を呼ばれたら、前に出て学生の後ろについて学生か子どもか先生を引っ張る。 反復する歌なので、覚えていくと思うので歌えるところだけでも歌ってもらおう。	子どもたちのそばにつく。並ぶように支援する。 前に出る子どもの名前を呼び、一緒に前に出て、引っ張る動作をする。 その際歌にあわせて行う。 (楽譜は後日渡す) 芋役を担当する。
13:45	楽器演奏 シロフォン数曲	学生Tが演奏する。	1回目は演奏を鑑賞する。 2回目は、タンブリンなどの楽器を音楽に合わせて鳴らす。	楽器を子どもたちに回して、叩けるように促す。
13:55	終わりの歌	終わりのあいさつをする。 終わりの歌を円になって一緒に歌う。	終わりの歌を歌う。	

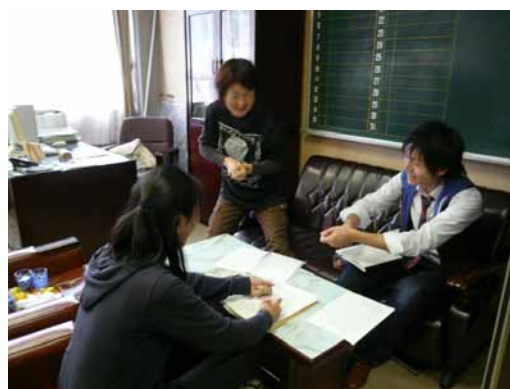
(3) 第2回目の打ち合わせ (2009年10月29日)

計画案①をもとに、第2回目の打ち合わせを行った。

第2回目の打ち合わせ前に、特別支援学校教員間で計画案①についての検討を行った。その結果、児童の参加の仕方について具体的にどうするのか、合同演奏はするのかしないのか、歌の事前指導の必要性について、芋役の登場の仕方について質問があった。

これらのことを確認しつつ、さらに、展開についての検討を行った。「はじまりの歌」に始まり、「定番のダンス」→「歌とお話」→「楽器演奏鑑賞」→「終わりの歌」という展開が計画されていたが、児童がまず着席し集合した様子をイメージし、はじめに着席した体制のまま、楽器演奏を鑑賞する方が児童にとっての動きが理解しやすいと考え、変更することにした。また、曲目も次の「芋掘り遊び」にイメージがつながりやすいように秋に関連する選曲を加えた。また、「定番のダンス」については、芋が抜けた後のお祝いのダンスとして全員で踊ることとした。従って、展開は「はじまりの歌」→「楽器演奏鑑賞」→「歌とお話」→「定番のダンス」→「終わりの歌」に修正した。また、会場の設定の仕方や児童の導線についても図で示しながら確認を行った。(写真1)

(写真1)



(4) 計画案①の修正 (計画案②の作成)

第2回目の打ち合わせ内容を受けて、計画案①の修正を行い、計画案②を作成した(表3)。さらに会場の設定、児童の動線についての図も作成した(図1)。

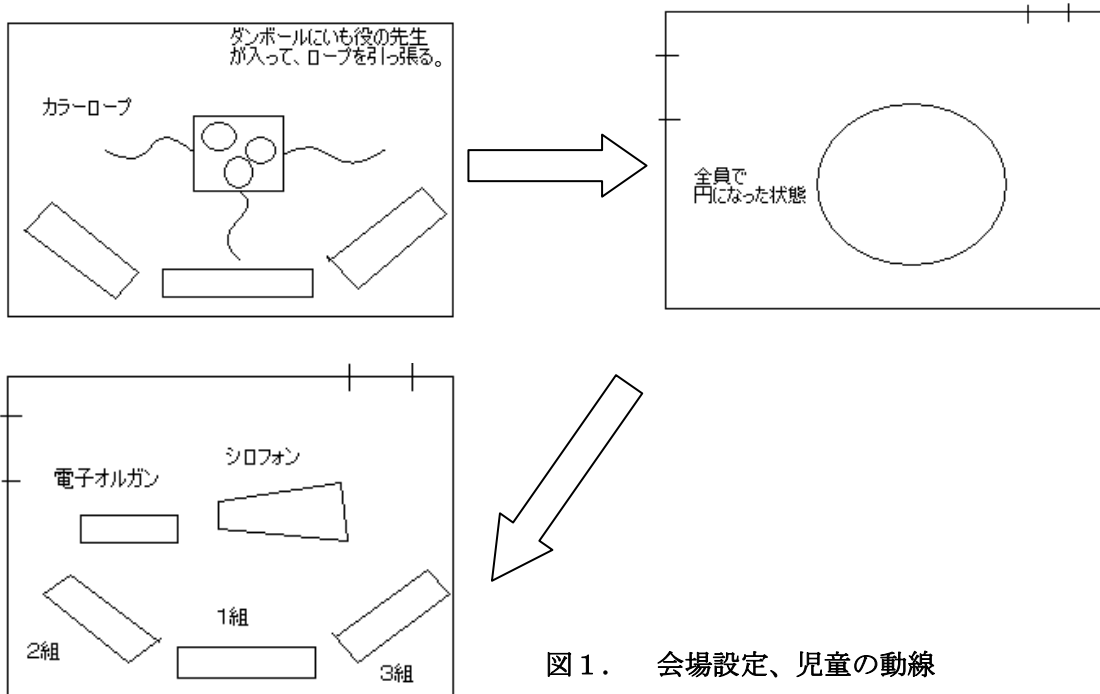


図1. 会場設定、児童の動線

(5) 第3回目の打ち合わせ —事前確認— (2009年11月4日)

実践当日、会場となるプレイルームにて、教材の準備、場の設定、展開、役割分担の確認を行った。教材について、芋役が隠れる際、当初は、巨大段ボールを用意していたが、大学教員より巨大な布が提供され、活用することとした。演奏鑑賞の前に、学生から、楽器と曲目の紹介をすることとした。児童が座る席、楽器の配置、活動場所(芋役的位置)については、入念に確認した。(写真2)

(写真2)



(写真3)

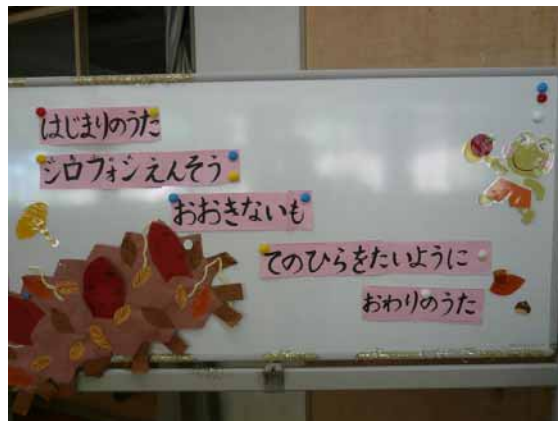


表3. 第4回目 計画案②

時間	プログラム	学生の動き	子どもたちの動き	附属教員の援助
13:30	はじまりの歌	はじめのあいさつをする。 一緒に円の中に入り歌を歌う。	歌を歌う。円の状態。 場(1)	
13:32	シロフォン演奏 「クシコスポスト」 「まっかな秋」 ○「まっかな秋」は、「大きな芋」の導入のBGMとして演奏する。	学生Tがシロフォンを、平井が電子ピアノを演奏する。 その他の学生は、児童の側に寄り添う。	「大きな芋」のグループごとに1列に並ぶ。 シロフォンの演奏を聞く。 ○季節の音楽を聞いて、季節を感じてもらう。 場(2)	児童をグループごとに並べる。 児童が音楽のリズムと同期できるように体を揺さぶったり、手拍子をする。
13:37	大きな芋	学生Tがおじいさん役となり、学生Nがおばあさん役となる。芋の苗を植えて育て、芋が大きくなりそれを抜くところまでを演じる。そこから、歌を歌い、芋をひっぱる動作をする。 助けを呼び、子ども数名と先生一人が後ろについて引っ張るように指示する。 全員の子どもを呼び終わり、歌を歌い終わったら芋が抜ける。ピアノ：平井 芋役：学生G	はじめは、学生の行う劇を見る。演奏のときに並んだまま、1列に並んで見る。名前が呼ばれたら、前に出て学生の後ろについてカラーロープをひっぱる。反復する歌なので、覚えたところから歌ってもらう。2組→1組→3組の順に呼ばれるので、呼ばれたら前に出て参加する。場(3)	芋役：附属の先生前に出る子どもの名前を呼び、一緒に前に出て、引っ張る動作をする。その際歌にあわせて動く。
13:50	「手のひらをたいたように」	芋が抜けた後、芋を円にして囲んで歌いながら踊る。	芋が抜けた喜びを感じながら芋を取り囲み歌い踊る。 ○自ら隣の人と手を繋ぐ姿が見られるか。	芋を中心に、円になるように促す。
13:55	終わりの歌	終わりのあいさつをする。 終わりの歌を円になって一緒に歌う。	みんなで芋を抜いたという達成感を味わいながら、終わりの歌を歌う。	

2. 実践

実践については時系列に沿って、写真とともに結果を報告する。

(1) 導入

児童が席に集合しあいさつをした後、特別支援学校教員より、幼児教育学科学生と教員の紹介を行い、本時の内容を、学生が作成した教材を使って説明した。

(写真3)

(2) 演奏鑑賞

楽器と曲目の紹介をした後、2曲（「クシコスポスト」「ちいさい秋見つけた」）の演奏を行った。児童たちは、演奏中、演奏者の方に身体を向け、マレットの動きや、響く音に高い関心を持つ姿が見られた。2曲目の「まっかな秋」では、曲に合わせて歌い出す児童がいた。教員たちと一緒に曲に合わせて、身体を左右に揺らす児童もいた。

(写真4)

(写真4)



(写真5)



(3) 歌とお話

おじいさん（学生：進行役）が登場する。替え歌『大きな芋』を歌い始める。「おじいさんが植えた、芋の苗から・・・大きな芋ができました・・・それを引っ張るおじいさん」の歌に合わせて、コミカルな動きで芋役につながったロープを、おじいさんが引っ張る。しかし、芋は抜けない。続いておばあさん（学生）が登場し、一緒にロープを引っ張る。「大きな芋は・・・ぬけません」と歌う。（写真5）

「さあ、誰かお芋を引っ張るのを手伝って」の合図で、附属教員が登場する計画であったが・・・、児童3名が、自ら席を立ち前を出て綱を持ち、引っ張り始めた。そこで、急遽「それを引っ張る〇〇さん（児童名）、それを引っ張る△△さん・・・、よいしょ よいしょ・・・」に変更して歌い、進行する。（写真6）

それでも芋は抜けない。そこで、計画通り、歌を繰り返しながら、2組→1組→3組の児童が加わって、綱を引っ張る。全員で綱を引くと・・・ようやく芋が抜ける。（芋役3名：学生2、附属教員1）

抜けた瞬間、「やったー」と児童が声をあげたり、飛び跳ねたりする。（写真7）

(写真6)



(写真7)



全員の力で芋が抜けたので、全員でお祝いのダンス『手のひらを太陽に』を踊る。（写真8）

(写真8)



(写真9)



(4) まとめ

最後に、特別支援学校教員から、本時のまとめをする。ここで、演奏のアンコールが起こる。アンコールに答えて「にんげんっていいな」を演奏する。児童も学生も教員も一緒になって、演奏に合わせて、身体を揺らしたり、歌を歌ったりする姿が見られた。（写真9）

アンコール演奏終了後、大学生と児童が対面して、お礼を言い合う。全員で手をつなぎ、終わりの歌を歌って終了。

3. 実践を終えての感想

第4回目の実践を終えて、大学生、特別支援学校教員、それぞれから感想を収集した。

(1) 学生から

- ・私は事前の計画に沿って活動が進まなかった時(この前の芋掘りのように思っていないところで子どもの動きがあったときに)、どうやったらそれを修正することができるか、と考えてしまっていたのですが、特別支援の先生方はたとえ最初の案とは違っていても子どもの自主的な動きや自分からやろうとしたことを受け入れて認めていこうとしていました。私は特別支援での活動を通して今まで自分がイメージした通りの形を実現しようとするあまり、子どもたちの姿が見えてないことが多々あったと気付きました。
- ・特別支援の活動では、活動の中で出てきた子どもの姿を大切にしていこうという姿勢がとても強く、このことに気付けたことが自分なりに得たことだと思います。
- ・子どもたちと先生と私たちが1つになったような気がしました。
- ・今までの活動では子どもたちは私たちのすることを、ただなんとなく見ているだけで終わっていたと思います。今回の活動を通して、私たちの提供の仕方次第で、子どもたちの反応にこれほどの大きな違いが見られるのだなということを学びました。参加型はやはりいいものだなとしみじみ思いました。(活動をしているときは大変でしたが。)
- ・非常に貴重な体験ができてよかったです。私も先生という立場ではありながらも、子どもたちに負けないくらい楽しめました。
- ・(幼児対象の「うたとおはなしの会」ではできなかった) 子ども自身に参加してもらうプログラムを企画したり、いかにして子どもたちが興味をもって楽しんで「見る」ことができるか、ということを深く考えるなど、特支で合同生活をさせていただくことで、たくさん学ぶことができました。
- ・今までは大人目線からしか活動内容を捉えられませんでした。子どもたちの立場で活動内容を考えるようになったというのが自分にとって一番大きな収穫です。子どもの立場に立つというのは、特別支援でも幼稚園でも必要なことだと思います。
- ・4回目の活動は、自分がとても楽しかったです。それはとても大事なことだと思います。不安な気持ちも子どもたちのパワーで吹き飛びました。
- ・(4回目の活動をビデオで見て) やはり参加型だと子ども達が本当にいきいきしていて楽しそうでした！なにより参加した学生3人が楽しかったと言っていたので、幼児でも特別支援の児童でも楽しませる為にはこちらが十分に楽しまないといけないと思いました！

(2) 特別支援学校教員から

- ・歌を反復することが効果的である。反復することで、歌詞や曲を口ずさむ児童の姿が見られた。
- ・曲のリズムが大変よく、曲選定の大切さを感じた。
- ・第4回目のような参加型の取り組みが、児童の音楽への興味の広がりにとってよい。
- ・活動内容が視覚的な掲示物によって理解しやすく、児童が集中して活動に取り組んでいた。
- ・展開にメリハリがあり、音楽鑑賞、活動参加等、内容構成がとてもよかった。
- ・力一杯、芋につながった綱を引くという効力感を得られる活動は児童が楽しめる。
- ・30分間があつという間に感じられるほど、集中して児童が取り組んでいた。

- ・歌『大きな芋』については、継続的に演奏し続けるのではなく、活動に合わせて、「抜けません」で一度止まって、次の活動の際に歌い出す・・・といったように、活動には区切りを入れた方が理解しやすい。
- ・芋が隠されていると、何が入っているのかわからず、不安になる児童がいるので、芋の顔がはっきり見え留段階から、次第に隠していくといった取り組みでもよかった。教材の提示方法はさらなる工夫が必要である。

IV. まとめと今後の課題

今回特別支援学校における音楽的活動を企画、実施した学生5人は、いずれも障害児教育専攻ではなく幼児教育専攻である。この5人の学生は特別支援学校における活動に先立って附属幼稚園において5歳児の保育を経験している。また、12月の「うたとおはなしの会」開催にあたり主に3～5歳児の子どもと保護者に音楽を伴うさまざまな遊びや読み聞かせ等を行った経験がある。しかし、障害児の発達やそれに必要な支援に関する専門的な知識がないまま、健常児を対象としたわずかな保育経験のみを基盤に活動が始まった。その結果、健常児では当然喜んで反応してくれるはずの歌や踊りであっても、特別支援学校においては思ったような反応が得られないといった体験がたくさんあった。そのような経験を重ねることで、特別支援学校の子どもたちに合った教材の選び方、提示の仕方、環境としての教師の動きの重要性などを学生は4回の活動を通して学んでいったと考えられる。特に4回目の実践においては、学生側が見せたり聞かせたりするだけの一方的な活動ではなく、子どもたちを主体的に動かすために子どもの行動を予想した計画や準備の必要性、実施中の予想外の反応が起こったときの教師の臨機応変な対応の仕方など、実際に体験を通じて学ぶことができた。

遊びを通じて子どもたちに生活に必要なさまざまな知識や技能を主体的に学ばせるという考え方は、幼児教育にも特別支援教育においても共通する考え方であり、今回の経験は将来幼児教育に携わるであろう学生にとって大きな意味をもっていたといえる。

一方、特別支援学校にとって、今回の一連の幼児教育専攻学生による音楽的活動の取り組みは、児童の経験を広げ、音楽に対する児童の興味・関心を高める効果があったといえる。例えば、反復される歌のフレーズを、活動とは違う場面で口ずさむ児童の姿が見られたり、シロフォンとオルガンの演奏では、前のめりになって鑑賞する姿が見られたり、曲に合わせて歌い出したり、手拍子や身体を揺すったりする姿を引き出すことができた。回数を重ねるごとに、学生の児童に対する関わり方や活動内容の工夫に変化が見られ、児童が自ら音楽活動に参加していく（綱を引っ張りにいく、手をつなぐ・・・等）姿も引き出すことができた。

今後の取り組みとしては、さらなる教材研究と、集団指導だけでなく個別に目を向けた児童の音楽に関する実態を把握する必要があると考えられる。すなわち、日々の児童の活動の様子から、音楽に関する実態を把握することによって、より個別に児童の興味や関心を捉えた教材や活動内容を選定することができ、より効果的な音楽活動を計画し、実施できると考えられる。

従って、今後は、活動計画段階において、特別支援学校での授業参観や授業参加の実施、音楽に関する実態把握方法の研究に取り組んでいきたい。

尚、今回の取り組みは、京都教育大学幼児教育専攻4年生5名、幼児教育科教員（平井）、附属特別支援学校小学部教員10名（中島、中川、稲葉、細川、八講、辰巳、寺田、金澤、打田、井上）、小学部児童15名によって実施した。